



# 蔵書展 金沢大学の源流

1999

金沢大学創立50周年記念展示実行委員会

金 沢 大 学 附 属 図 書 館

金 沢 大 学 資 料 館

## 蔵書展 金沢大学の源流

---

### 開催にあたって

急速な近代化のうねりの中で、幕末から明治初期にかけて、金沢では多くの専門（高等）教育機関が興亡した。これらの教育機関はやがて本学の前身である第四高等学校、石川師範学校、金沢医科大学の三系列に統合されていく。さらに大正9年に金沢高等工業学校、昭和19年には金沢高等師範学校と、新たな専門教育の流れが加わる。

本展では、附属図書館本館蔵の「四高蔵書」「師範蔵書」、医学部分館蔵の「医科大蔵書」の中から、前身校の初期に使用されたと見られる書籍を選び出した。これらの書籍は、その蔵書印から、加賀藩末から初期の石川県で購入されたと考えられる。黎明期の近代教育の一端、金沢大学への源流を紹介する。

遡れば幕末の藩校改革に至る本学の前史を再確認し、金沢の地に早くから兆した高等教育の伝統を想起してみた。

---

## 目次

特別資料	1
藩校から県立、官立教育機関へ	7
医学教育の系譜と古医書	10
第四高等学校	15
石川（県）師範学校	24

## 特別資料

### 1. 成瀬正居日記

幕末から明治にいたる動乱の時代を生きた金沢人、成瀬正居（ナルセマサスエ）（1828-1902）の日記である。虫損が激しく長い間利用出来ない状態であったが、平成8年度より3ヵ年計画で修復作業が行われ、この程修復が完了した。日記は、藩校明倫堂へ通う15歳の少年の日の記録から始まる。毎日の天候や友人、親類縁者との交際、先生の授業の様子など、時刻を記入して克明に綴られている。幕末・維新时期の日記は、彼が加賀藩の中枢に関わる要職を歴任した時期であり、精彩をはなっている。加賀藩史研究の第一級の史料として今後の研究が待たれる。また金沢城下で起きた様々な事件も記録されている。さらに加賀藩洋学校壮猶館（ソウユウカン）の長官にあたる壮猶館主附（シュツキ）を勤め、明治6年から現在の教育委員会にあたる学務課に勤務したこともあり、草創期の石川県教育史の史料として重要であると思われる記録も多い。また、役職に伴い在住した、小松や富山県の魚津や泊、幕末に往還した京都、大坂、江戸などへの、旅行記の部分も多い。附録として、「京都地理研窮記」「能州地利研究記」と題した旅行記がある。晩年の日記には、白山比咩神社の神官としての生活が細かに記録されている。

成瀬正居は文政11年4月23日、加賀藩人持組 成瀬正敦（ナルセマサアツ）の嫡子として、金沢に生まれた。通称甚五、主税、子美。号は松窩。加賀藩の人持組は最高家格である八家に継ぐ高位の家柄である。父正敦は、公事場奉行、御算用奉行、寺社奉行、若年寄等

の重職を歴任した。正居は安政元年父の病死により、その跡目を相続した。知行高、二千五百石。同年2月定火消役を皮切りに、同2年壮猶館御用主附、同3年小松御城番、同4年魚津在住、文久2年越中泊在番、などの役職を歴任。文久3年には、寺社奉行に就任した。慶応3年より御近習御用となり、幕末・維新时期加賀藩の中枢にあって活躍した。明治2年の版籍奉還ののち、金沢藩の権少参事となる。廃藩置県以降は、明治6年石川県に出仕し、学務課等に勤めた。明治15年、白山比咩神社禰宜に任じられた。明治35年10月4日没。享年75歳。

正居はこの日記のほか、「魚津在住日記」「小松御城番御用方留日記」「泊在番御用達留」「壮猶館御用雑記」「壮猶館御用日記」「寺社方御用日記」ほか膨大な記録を残している（その多くは金沢市立玉川図書館に所蔵されている）。また、歌学を田中躬之（ミユキ）に学び、歌人としても著名である。「言霊傳」「歌題四季部類」の著書が知られている。

「成瀬正居日記」は、大正14年に遺族の成瀬桓氏より第四高等学校へ寄贈され、金沢大学附属図書館へ引き継がれたものである。寄贈当時の記録には57冊とあり、現在と同じである。それぞれの表紙には墨筆と朱筆で書かれた通し番号がついているが、朱筆の通し番号には欠番がなく、寄贈当時に書かれたものと思われる。一方、墨で書かれた通し番号は、所々欠番になっている。さらに、欠番の前後の日記の表紙に、失われた日記について朱筆の注記がある。これにより日記の原形は、全71冊、書かれた年代は、天保9年（正居10歳）から明治34年（死の前年、正居74歳ま

で、であることがわかる。現存する日記は天保14年の下冊（7月より）から、明治34までの57冊である。横帳仕立ての和装本42冊（そのうち第一冊目だけは縦長の小本）、洋装の懐中日記15冊。

## 2. 暁烏文庫の古写経、古刊経

- (1) 大般若波羅蜜多経 初分真如品  
第四十七之七 卷子本 [平安時代写] 1軸

写経は、現世・来世の幸福を祈願して行われた。平安時代中期以降になると、貴族階級の間で美術的意匠を凝らした写経が行われるようになる。これらを装飾経と呼ぶ。本書もその一種で、紺紙に金字で描かれた扉絵を持ち、金字で書写された紺紙金泥経と呼ばれるものである。当時の信仰生活を伺える貴重な資料である。今回の展示にあわせて修復された。

- (2) 大般若波羅蜜多経 第六十六  
初分無所得品 第十八之六 三蔵法師玄奘  
奉詔譯  
[鎌倉時代]刊 卷子本 1軸

本書は古刊経の一種で「春日版」と呼ばれるものである。奈良の興福寺で僧の講学のために刊行された。神仏混合時代、同寺が別当寺であった春日神社に奉納するという刊語がついているものがあることから言われた呼名。鎌倉時代前半が最盛期である。

- (3) 佛説高王観世音経 1巻 [宋代刊] 折本

1帖

本書は中国の宋時代に刊行された古刊経。ある信仰厚い男が無実の罪で死罪となり、刑場にて打ち首となった朝、前夜の夢でこの経を1千篇称えよと教えられ、その通行うと、打ち首の刀が三度まで折れて、命が救われたという伝説があるお経である。一名折刀経。京都の高山寺の蔵書印および徳富蘇峰の蔵書印および識語がある。蘇峰から暁烏敏に送られたもの。

- (4) 金剛般若論 2巻 無着造、達磨笈多譯  
[高麗刊] 1冊

朝鮮の古刊経。金剛般若経の解説書。朝鮮綴[五つ目綴]の線装本。下巻末に刊記「壬寅歲高麗國大蔵都監奉勅雕造」。

## 3. 近世木活字版 韓非子翼龜

- 首1巻本文20巻 太田方[全齋]述  
文化5年(1808)刊 20冊

著者は、太田全齋、名は経方または方、幼名亀之助、通称は八郎、字は叔亀。備後国福山藩の定江戸藩士。宝暦九年(1759)江戸生まれ、文政十二年(1829)没。

「韓非子翼龜」は、清朝の考証学者の注が諸子の書に及ぶ以前においてわが国の学者が示した高い業績と評価されている。本書はまた出版にまつわる苦難が有名で、その跋文によると、まず三十歳前後から四十三歳までかけて一応成稿を見たが、江戸巢鴨の藩邸で危うく焼失しそうになったに鑑みて活版化することとし、木活字2万個を求め、不足分一万字を長男と次男が彫り、三男が版を摺り、八年を費やし、文化五年二十部を刷り上げた

いう。

#### 4. 巖如春自筆 歴史風俗考証図

巖如春 明治元年(1868)－昭和15年(1940)。名は甚蔵。父も甚蔵で金沢の槍師だった。廃藩置県後は梅翁と号して画を持って業とした。如春はその長子で祖先以来の地、竪町に住む。七歳で四条派の飯山華亭の門に入って絵筆をもつ。のち狩野派の佐々木泉龍に師事する。如春は、加賀藩の風俗典礼の故事に精通すること生き字引の如くで、その旧藩時代の風俗画は艶麗精緻をきわめた。また、地方文化の向上に貢献すること二十六年の長きに及び、大正四年(1915)創立の加能史談会の理事を勤める。

- (1) 加賀藩年中行事図絵 昭和7年巖如春画  
折本 4冊
- (2) 儀式風俗図絵 昭和8年巖如春画  
折本 2冊

#### 5. 加賀藩の出版物

- (1) 監本四書 宋朱熹 明倫堂訓点 天保15年(1844)刊 加賀国学蔵版 10冊  
本書は明倫堂の教科書として使われたもの。中国の国子監で編纂されたものを監本という。
- (2) 四書朱子本義匯参 43巻 清王步青撰 王士鼈編 天保7年(1836)刊 加賀国学蔵版 42冊

明倫堂では三ヶ年間八分以上出席した者には論語匯参一部を賞賜し、その後三年間怠らなかった者には、孟子匯参を与え、更に三年

間、精励した者には、大学匯参・中庸匯参を与えた。全期九年間で全巻揃う褒賞のしくみになっていた。

(3) [欽定四経] [嘉永4年(1851)]刊

加賀国学蔵版 100冊

御纂周易折中 22巻首1巻、  
欽定書経伝説彙纂 21巻首2巻、  
欽定詩経伝説彙纂 21巻首2巻、  
欽定春秋伝説彙纂 38巻首2巻

天保13年(1842)に、幕府は十万石以上の大藩に命じ、大部の漢籍を翻刻させた。「一体、大身之輩は心掛次第、大部之書一、二部宛も蔵板致し、普く後来にも相伝候様有之度事に候。この段十万石以上之面々へ無洩急度可被相達候」

加賀藩では欽定四経と文献通考(正統)とを刊行する計画を立て、まず前者から着手した。弘化元年(1844)3月そのために藩儒大島桃年が欽定四経校正御用頭取を命ぜられた。直ちに校正を始め、嘉永二年末にその作業を完了し、翌三年十月には刊刻を終わらした。同四年六月には幕府への献上本二部を製本した。

#### 6. 金沢版英和辞典

廣益英倭字典 大屋愷等編 金沢

明治7年(1874)刊 1冊

英語タイトル: An English Japanese

Dictionary, together with a table of irregular verbs, and a list of English signs and abbreviations. New edition. Kanazawa in Kaga, 1874.

金沢で出版された英和辞典。本書は序文によれば壮猶館翻訳方であった鹿田文平により企画され、弟子であり、同じく壮猶館の翻訳

方を勤めた大屋愷故が中心となり完成された。本文に記載されていないが印刷は小嶋致将が担当した。小嶋致将は加賀藩の甲冑師明珍宗英の次男で、明治5年印刷所経業堂を開設した。活字鑄造機を購入して金沢における金属活字による出版の基を開いた人物である。

## 7. 日本最初の仏和辞典 仏語明要

村上英俊（1811—1890）はわが国フランス学の始祖といわれる。英俊は下野国那須郡佐久山（栃木県大田原市）の本陣、佐野屋の当主、村上松園の長男として文化八（1811）年四月八日に生まれた。十四歳のとき、一家をあげて江戸に移住、松園がわが子に医学を学ばせるための移住であったという。漢学を大野鏡湖、医学を足立長雋、蘭学を宇田川榕菴に学ぶ。天保十二（1841）年妹チエが松代藩主の嫡子真田幸良の側室として住む信州松代に移住。松代藩士佐久間象山と知り合う。

象山が火薬製造の必要から取り寄せたスウェーデンのベリセリウス Jones Jacob Berzellius の『化学提要』がオランダ語訳でなくフランス語訳であったので、翻訳を勧められた。英俊は五ヶ月をかけてフランス文典を独習したのち『化学提要』を読もうとしたが、一行も読むことができなかったという。さらに十六ヶ月の難行苦行ののち、ようやく『化学提要』を読破したという。

嘉永四（1851）年江戸に出る。松代藩邸の片隅に住み、『三語便覧』（仏・英・蘭の三カ国語対照辞書）、『仏英訓弁』を刊行。そののち、仏和辞書の編集に取り組み、安政四年（1857年）『仏蘭西詞林』を書き上げて、松代藩主真田幸教に献上する。幸教は、

国家有用の辞書を藩に私蔵するよりも、幕府の公用に役立たせたいと、幕府に納めた。この辞書はいま伝わっていないので、内容は明らかでないが、英俊のフランス語の学識がかわれて、安政六年、幕府の蕃書調所の教授手伝にあげられた。

後進を育成するかたわら、さきの『仏蘭西詞林』を増補して『仏語明要』四巻を出版した。わが国で刊行された最初の仏和辞書である。総計370丁（740頁）、見出し語は3万5千を超える。この辞書は従来の辞書とは異なり、左綴じ、横書きという体裁にくわえて、語のアルファベット順の配列、品詞の区別、動詞の活用、成句などが記載されているもので、今日の辞書の原型を示している。

これは官版ではなく、英俊の自費出版であった。門弟のほか、英俊自身も、鷺鳥の羽を切って作ったペンで版下のフランス語を書き上げた。資金に困窮したが、門人上原塙一郎が出してようやく出版にこぎつけた。明治三年『明要附録』を刊行する。成句、単位、固有名詞などを収録している。

英俊は慶応三（1865）年、私塾達理堂を開いて後進を教えた。（門人録には429名の名前があり、中江兆民が破門されたことは有名）明治十八（1885）年フランス政府より日本のフランス学の発展に寄与したとしてレジョン・ドヌール勲章がおくられた。明治二十三（1890）年東京府北豊島郡金杉村にて永眠。享年78歳。

金沢におけるフランス学は、吉木順吉により始まる。吉木は石州津和野藩の脱藩者で、江戸に出て村上英俊のもとでフランス学を学んだ。加賀藩の藩費留学生のうち仏学希望の者たちは、仏学に通じ、また漢学にも造詣深い吉木順吉と知り合い、江戸で民家を借りて

彼に就いて学んだ。ところが慶応四（1868）年早々戊辰戦争が勃発する。藩命により金沢に引き上げた彼らは、吉木を金沢に招き狂言師、晝屋九郎兵衛の能舞台を教場として学塾を開いた。それが藩の認めるところとなり、明治元（1868）年閏四月、藩校道済館と命名された。英仏学の他、漢学、数学なども教授された。吉木は同年十月に金沢を去るが、菊野七郎が後を継いだ。吉木、菊野をはじめ、二十名に余る加賀人の名前が村上英俊の門人録に記載されている。

(1) 佛語明要 4巻 村上英俊著  
元治元年(1864)刊 達理堂蔵版 4冊

(2) 明要附録 1巻 村上英俊著  
明治3年(1870)刊 達理堂蔵版 1冊

## 8. 明治中期の大学講義筆記 早崎信太郎手記

「早崎信太郎手記」は明治14年から四年間東京大学理学部に在籍した石川県出身の俊才早崎信太郎の大学講義筆記である。全冊すべて英文で書かれている。外国人教師がその母国語で講義をするのは当然であるが、当時は日本人教師も英語で講義を行い、学生との質疑応答なども英語で行われたのである。

以下各冊の内容を日本語に訳して示す。括弧の中には学年および講義した教師の姓名である（教師の姓名は「東京大学法理文三学部一覽」「東京大学百年史」などと照合し、補記した）。

[第1冊] 高等数学

微分学（第一学年 三輪桓一郎）  
積分学（第一学年 三輪桓一郎）  
差分方程式（第二学年 菊地大麓）  
立体幾何学（菊地大麓）

[第2冊] 静力学・動力学

力学（第一学年 J.A. ユーイング）  
方程式論（臨時講義 菊地大麓）  
静力学（第二学年 菊地大麓）

[第3冊] 電気と磁性（第四学年 C.G. ノット）

[第4冊] 物理学

一般物理学（山川健次郎）  
電気（第三学年 C.G. ノット）  
幾何光学（第三学年 寺尾寿）  
確率解析（臨時講義 寺尾寿）  
物理光学（第三学年 山川健次郎）

[第5冊] 動力学（第四学年 北尾次郎）

[第6冊] 動力学2（第四学年 北尾次郎）

[第7冊] 表題なし

確率解析、方程式、複屈折解析、  
微積分学など、他の講義録の補遺

明治10年4月、東京開成学校と東京医学校を合併して東京大学が創設された。創設当時の法・理・文三学部の教授21名中16名がお雇い外国人といわれた欧米人教師であった。早崎の在学した明治十年代の後半になると、明治政府が欧米各国へ派遣した留学生が次々と帰国し、外国人にかわって日本人教授がその位置をしめることになる。

講義筆記に登場する外国人のうち、ユーイング (Ewing, James Alfred 1855-1935 スコットランド人) は、明治11年来日、地震の頻発する日本で地震学を研究する必要性を痛感して、工部大学校のミルンと共に日本地震学会を創設し、水平振子型のすぐれた地震計を

考案した。明治16年帰国。ノット (Knott, Cargill G. 1856-1922 英国人) はユーイングの後任教授として明治16年来日。電磁気学、音響学、力学を講義する。明治20年田中館愛橘らと共同で、日本全土の磁気を測定し、翌年「日本全国地磁力実測報告」を出す。明治24年帰国。理学部(当時は理科大学)の最後の外国人科学教師であった。一方講義ノートに登場する日本人教師達は、以後日本の学術・教育界の中心として活躍していく。

早崎は卒業後間もなく死去したらしい。同じ石川県出身で理学部の同期生北条時敬(早崎は物理学科、北条は数学科)の明治19年の日誌に2月22日を初めとして、中橋徳五郎(石川県出身)と「早崎氏遺族弔慰」、「義捐金」の相談をしている記事が数カ所載せられている。死亡時の記載はないから、早崎の没年は明治18年、それも年末ではないかと推測される。明治18年10月31日に行われた学位授与式の記録(「学芸志林」第100冊)には「理学士の分 物理学科 早崎信太郎」とある。早崎はその式典に出席できたのであろうか。手記各冊の見返しに「故早崎信太郎氏手記」「理学士早崎信太郎蔵」と墨痕鮮やかに書かれている。業半ばで倒れた俊才への思いを込めての揮毫と思われる。誰の筆であろうか。この手記は第四高等中学校の前身校、石川県専門学校へ寄贈されたものである。

## 9. ペリー提督自筆署名入り 日本遠征記

Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by order of the Government of

the United States. Compiled by Francis L. Hawks. Washington, 1856. 3 v.

第1巻のタイトルページにジョージ・ジョーンズ宛のペリー直筆の署名がある。三森良二郎氏(加賀市出身)がアメリカ滞在中の古書店で発見し、昭和41年附属図書館へ寄贈されたもの。

## 10. アダム・スミス 哲学論文集 初版本

Essays on philosophical subjects by the late Adam Smith, to which is prefixed, an account of the life and writings of the author by Dugald Stewart. London: printed for T Cadell jun. and W. Davies (Successors to Mr. Cadell) and W. Creech, 1795.

スミスの遺稿集。没後5年たった1795年に友人の化学者・医学者ブラック(Joseph Black, 1728-1799)と地質学者ハットン(James Hutton, 1726-1797)により編集、刊行された。最初に编者による序文“Advertisement”があり、そのなかでスミスは死の直前に公表するのが不適当と考える他の多くの草稿を廃棄して、残りのこれらの論文を友人達にたくしたとある。序文に続いて最初の本格的伝記といわれる、ステュアートのスミス伝が収められている。

(収録論文): 「天文学の歴史」「古代の自然学の歴史」「古代の論理学及び形而上学の歴史」「外的諸感官について」「いわゆる模倣的諸技芸において行われる模倣の本性について」など7個の論文。

附属図書館 梶井重明



## 藩校から県立、官立教育機関へ

### 1. 第四高等学校、石川師範学校へ

加賀藩五代藩主前田綱紀は文事を尊び、木下順庵、室鳩巢、稻生若水等の碩学を招聘し、文教の隆盛期を築いた。綱紀の没後68年たった寛政4年、十一代藩主治脩（はるなが）は儒者新井白蛾を招き文学堂明倫堂、武学校経武館を創設した。明倫堂は文政・天保の2度の学制改革を経て明治初めまで存続する。

安政以降は壮猶館に始まる洋学系の諸校が勃興した。これらの洋学校は明治3年に中学東校に統合される。皇漢学の教授は明倫堂で行われ中学西校とされた。この間、明治2年6月版籍奉還が行われ、加賀藩は金沢藩、藩主前田慶寧は藩知事となっている。明治4年7月廃藩置県がなされ、旧藩知事は東京に移住、代わって金沢県大参事内田政風が赴任した。同年11月西校の皇漢学に東校の洋学を加え金沢中学校が設立されるが、明治5年4月、学制の公布を前に旧藩立の全ての学校は閉鎖された。「石川県学務沿革略記」には「明治五年四月明倫堂ヲ閉ツ」と記されている。ここまでの藩校の流れである。

石川県は旧藩立校の閉鎖に伴う措置として、明治6年1月仙石町旧明倫堂に変則学校、旧巽邸に英仏学校を設置した。いずれも「旧藩学校元資金を以て之を維持」した。5月には旧巽邸に変則専門学校がおかれた。藩校の系譜はこうして継承された。（旧巽邸は「石川県学務沿革略記」では「旧藩英学校（中学東校）の跡」と表現されている。）

明治7年8月に英学校（英仏学校は明治7

年5月仏学を廃止）の一角に小学教員養成のための集成学校を設置した。学制実施に始まる新たな流れである。藩校系と師範系の両系統は、教員の兼任、「金沢学校」「学校」印の書籍が両系統に残されていることなどから、この時期は互いに流動的であったと思われる。「長氏邸址に変則中学校を起し、一年余にしてその生徒を二分し上級生を巽邸に移し巽中学校と称す。～略～而して変則中学校は中年学校と改称し、残れる生徒を教授す、後幾許もなく閉鎖し、生徒の多分は集成学校に入る」（田中鉄吉『郷土数学』1935）。長町変則中学校の生徒の一部が集成学校に移ったことを示す注目される記述である。

「附属小学校類似のものとしては小学校を卒業したものをいれた啓明学校の下級生を利用したもので、何分十八、九の詩経程度の生徒にイロハから教える～中略～腕力に訴えて飽く迄もイロハから教えた乱暴な時代であった」（『石川県師範教育史』明治8年3月卒石川県師範学校第1回卒業生の談話より）文中「啓明学校」とあるのは藩校系の変則中学校のことと思われるが、中等から高等程度に相当する「詩経」段階の藩校系の生徒を、教育実習に使ったという点が興味深い。

師範学校は、明治14年「師範教育大綱」により初等教育に接続する中等学校程度の機関と位置づけられた。明治40年「師範学校規定」で中等学校に接続する「本科第二部」が設けられた。本科第二部は、当初は、従前の高等小学校に接続する本科第一部を補充する機関であったが、徐々に重要な位置を占めるようになり、昭和6年「師範学校規定」改正により2年制とし、本科第一部と対等の位置に引き上げられた。昭和18年「師範教育

令」改正により、中等教育に接続する専門学校程度に昇格した。同時に県立から官立となり校名を石川師範学校と改めた。

藩校系は、後述するように啓明学校、石川県中学師範学校、石川県専門学校と専門性を高め高等教育機関としての実を備え、明治20年第四高等中学校の設置となる。

## 2. 官立医学校へ

### 1) 金沢医学館、金沢医学所

壮猶館は、前身の西洋火術方役所の名が示すとおり、洋式砲術の訓練研究機関として安政元年に発足した。加賀藩が洋式の軍備を整えるにあたり、航海・測量・語学などが加わり洋学校としての体裁を持つようになる。原書の解説の必要から黒川良安、津田淳三、鹿田文平の蘭方医が翻訳方として用いられた。のち翻訳方として大田美農里、田中信吾らが加わる。蘭医学の解説は文久2年に始まっている。加賀藩における近代医学教育の起源である。英学は文久元年から取り入れられ安達幸之助が最初の翻訳方になっている。英学には前述鹿田文平、大屋愷故、三宅復一らがいる。

元治2年加賀藩は、半官半民の施設であった彦三種痘所（文久2年設置）を南町に移し、金沢藩種痘所とした。慶応3年藩は卯辰山を開拓し、卯辰山養生所を設置、種痘所をここに移し、黒川、津田、大田、田中と高峯精一らを棟取とし、医療と医学教育を行った。

明治3年医学館が開設（現在、大手町金沢市総合健康センターの地）、卯辰山養生所の学生を移した。

明治5年4月、医学館は旧藩立の諸校とともに閉鎖される。旧医学館は、大田美農里ら有志の私費と県の補助によって維持され、明治8年6月県立の石川県金沢病院として再興する。同年7月スロイスに代わり蘭医ホルトルマンが着任（明治12年6月まで）する。

明治9年金沢医学所が金沢病院から独立、医育部門と医療部門が分離される。大田美農里が石川県病院長、田中信吾が医学所長となる。明治12年金沢病院を医学所に隣接する殿町に新築。

### 2) 金沢医学校

明治12年11月金沢医学所は金沢医学校と改称する。田中信吾が校長に任ぜられる。

蘭医ホルトルマンにかわり明治13年4月にオーストリア人ローレッツが着任、ドイツ医学をもたらすが、同年8月に解雇され、山形医学校へ去る。

明治13年9月金沢医学校通則を改正。同通則は設立の目的を、「新医養成の道未だ全く開けず故に」疾病により失われる生命が多く「医生を養成するの急切なる今日より甚だしきは莫し。是れ本校を設くる所以なり」としている。

さらに「東京大学医学部通学生の規則に倣ひ茲に医学の大意を教授し以て医生を養成せんと欲す」とある。東京大学医学部の前身東京医学校は明治8年5月「年齢既に長じ外国語学数学拉丁学等を修むるの暇なきもの及び事由ありて大学7年の久しきに耐えざるもの」を対象に「通学生教場」を設置した。ドイツ人教師による医学専門教育を目的とした本科・予科に対する、日本人教官による速成課程であり、「実地修業を主とし、速成を期

するが故に講義は全て国語」で行った。修業期間3年。通学生とは、本科生と予科生が寄宿舎に収容され寄宿生と呼ばれたのに対する呼称である。明治10年4月東京医学校は東京大学医学部となるが、東京大学医学部通則にも通学生の制度は存置された。その時の修業期間は3年半とした。さらに明治12年3月、修業期間を4年に延長する改正がなされた。石川県金沢医学校通則の学科課程はこの明治12年3月の改正による東京大学医学通則生学科課程と同一である。金沢医学校は中央の医師速成機関の地方版ともいうべきで、こうした医師の養成が近代化に果たした役割は大きい。

明治13年9月ローレッツに代わって東京大学医学士外山林介、伴野秀堅が招聘された。東京大学医学部の講義はドイツ医学を主流としており、この時期、金沢医学校では和蘭医学とドイツ医学が併存した。

### 3)金沢甲種医学校

明治16年政府は、明治12年の教育令、翌13年の改正教育令に基ずく改革のひとつとして医学校通則を定め、医学校を甲乙2種にランク付けした。甲種医学校は医師開業試験を必要としない正規の機関、乙種は速成の機関とし、甲種は教官中少なくとも3名の医学士をおくと定めた。甲種に認定されたのは、岡山、千葉、愛知、京都、大阪、神戸、和歌山、広島、三重、金沢の各医学校である。

金沢医学校では、明治15年以来医学士を迎え体制を整えてきたが、明治17年3月石川県甲種医学校と認定、石川県甲種医学校規則が制定される。旧藩以来の田中信吾ら緒方洪庵門下の蘭医学者による体制は、東京大学

が依るドイツ医学と交代する。また医学校通則第10条「少なくとも3名の医学士」に「重要な学科を分担せしむべし」の条文に対応し、明治18年から初めて内科、外科、眼科、婦人科の分科制がとられた。

### 4)第四高等中学校医学部

明治19年の中学校令で、帝国大学への進学者に必要な予備教育を行う高等中学校が設置された。高等中学校は、分科として医学部・薬学科・法学部・工学部などの高等専門教育を行う機関としても規定された。高等中学校に医学部を付設するにあたって、千葉・仙台・岡山・金沢・長崎の甲種医学校を官立の高等中学校に移管吸収することとした。

第四高等中学校は明治20年4月に金沢におかれ、同年8月医学部が設置された。12月石川県甲種医学校長木村幸蔵が医学部長となり、翌21年4月開講、8月石川県甲種医学校の敷地校舎資産を第四高等中学校に引き継ぐ。

この後、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学と官立の高等教育機関として発展していく。

資料館 在田則子

## 医学教育の系譜と古医書

加賀藩第五代藩主前田綱紀は歴代藩主の中で最も学問を好み、古今内外の書籍を蒐集し、藩校の教材に供した。新井白石はこの書庫を見て「加賀は天下の書府たり」と感嘆したという。これらの書籍は、現在東京目黒の尊経閣文庫（前田育徳会）及び成巽閣に保存されている。

明治3年金沢大手町の津田玄蕃邸に医育機関として、独立した金沢医学館が開館した（正式には蘭医スロイスが来任した明治4年3月に開館式が行なわれた）。開館に先立ち、藩主慶寧は、卯辰山養成所棟取黒川良安に命じ、明治元年長崎で医学館開設に必要な医書、機器類を調達させた。この中にオランダ製人体模型があり、これは現在、日本で保存されている最古の人体模型の一つとして医学部記念館に保存されている。また、黒川が長崎で求めた医書を始め、藩校（壮猶館）、卯辰山養成所の医書の本数は決して少なくない。

昭和50年酒井恒名大教授（当時金大解剖学助教授）によって、和綴本1365冊、洋書2119冊（1900年以前）が整理され、「古医書目録」が作成された。更に平成5年この目録の補遺版が整理作成され、質量ともに日本有数の古医書文庫となり、天下の書府に恥じない。

金沢医学館は、明治期に金沢医学所、金沢医学校、石川県甲種医学校、第四高等学校医学部、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校へと時代の変遷に伴い、発展を続けるとともに、医書の充実も格段と進んだ。その基盤は、校友会の「十全会」と教授達の寄贈図書によるもので、それぞれに校印、私蔵印が付されている。

大正11年勅令により官立医科大学制が布かれ、翌年金沢医科大学に昇格した。この時、大学の頭脳となる図書の充実が文部省の予算化により実行された。日本の医学の教育研究の主流は、明治以来ドイツ医学であったので、教授達は競ってドイツへ留学した。大学への昇格前後、ドイツへ留学していた古畑種基、山田詩郎、上野一晴、泉仙助、山田邦彦の諸教授は、医学を中心としてその周辺領域の外国雑誌のバックナンバーを創刊号に遡って、重複を避けて徹底蒐集し、丈夫な木箱に収めて大学へ送った（当時のドイツはインフレの最中で、生活難のため多くの蔵書が安価で店頭へ放出された）。当時の図書館員であった故三宅次吉氏は連日深夜に及ぶ整理作業を一人で片付けたと述懐している。金沢医学専門学校会計簿を見ると、大正11年3,684円、12年7,011円、13年5,052円、14年6,9828円の図書購入費（一部製本費）が記帳されている。現代で評価しても、驚異的な額で、また入手不能のものばかりで、まさに至宝といわねばならない。

戦後四十五年間、医学図書館に随分厄介になった。生き字引のような三宅さんをはじめ、五十嵐さん、そして細川さんらが図書整理を徹底担当してこられたので、面倒な文献索引に容易に道を開いていただいて、大変感謝している。今日では医学図書館の位置づけは、単に金沢大学に限らず、全国的視野で有数の図書館として評価されている。全国の老舗と言われる他の医科大学の図書館を訪ねてみると、このことが一層鮮明になる。今回展示の古医書は、藩政期を除き、本医学部（主として明治期）で医学教育に関与した人達の著書である。

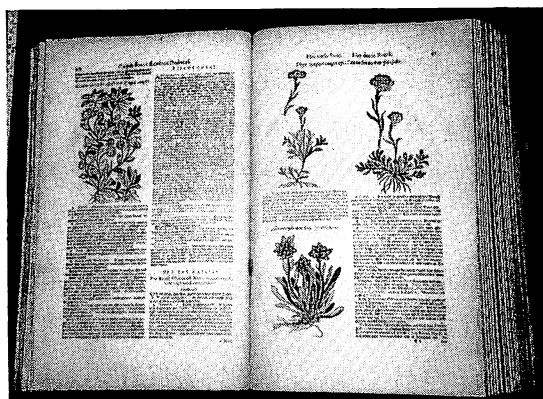
## 附属図書館医学部分館蔵古医書

### 1. ドドネウス和蘭本草書

Dodnaeus, Rembertus  
Herbarivs oft Crvydt-Boeck  
Antwerpen. 1644. 1冊  
491.5-D-1

記念館資料室

前田綱紀が延宝年間に注文した「和蘭本草書」である。東京大学理学部に1608年ライデン版、早稲田大学と東京国立博物館に1644年アントワープ版を夫々蔵している。「蘭学階梯」にいう「ヘルバリウス・コロイドブック」とは本書のことであり、寛保元年野呂元丈が本書から和訳した「阿蘭本草和解」は我が国における西洋本草学の嚆矢である。本書には寛政9年宇田川玄随訳「遠西草木略」をはじめ種々翻訳があり、極めて有名な原書である。



ドドネウス和蘭本草書

### 2. 解体新書 序図, 1-4

キュルムス著 杉田玄白訳 江戸  
須原屋市兵衛 安政3 5冊  
491.1-Su-2  
記念館資料室

日本における西洋解剖書の最初の翻訳書で

杉田玄白、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周（前野良澤）らにより、全5巻として安永3年（1774）刊行された。原典はドイツのKulmusの解剖図表のオランダ版である。図譜は秋田藩士小田野直武の筆によるが、原画の精巧さをよく伝えていると、評価される。

### 3. 増補重訂 内科撰要

ヨハネス・デ・ゴルテル著 宇田川玄随訳  
風雲堂 寛政5 6冊  
493.1-Go-1  
記念館資料室

玄随は桂川甫周からゴルテルの原書を渡され「西説内科撰要」を刊行し、更に改定しようとしたが完成をみずに死去。その後、藤井方亭により文政5年増補重訂版18巻が刊行された。西洋内科書の嚆矢であり、近世内科学の規範となった。

### 4. 和蘭字彙

桂川甫周著 東京 山城屋 安政2 9冊  
849.3-Or-1  
記念館資料室

和蘭人ゾーフが天保4年に完成したゾーフハルマ（長崎ハルマ）を校訂して刊行された蘭日対訳辞典で、編者は幕府侍医法眼桂川甫周である。本書は、加賀藩藩校で購入され、金沢医学館へ引継がれオランダ書の解説に大変役立った。

### 5. 和蘭語学原始

1844刊 安政3翻刻 24丁  
849.35-Or  
記念館資料室

加賀藩の藩校時代に活用されたオランダ語入門書である。当時の収蔵印が付されている。

6. Oudemans, C.A.J.A.

Natuurlijke Historie van Nederland  
De Flora.  
Amsterdam, G.L. Funke, 1869. texts 3v.  
plates 2v.  
462-N-1~3

本書はスロイスが金沢を去る際、寄贈したものと伝えられている。後年オランダ艦隊司令官として来日したスロイスの子息は金沢を訪ね（1920.5.20.）本書を見て図譜に書かれているラテン名の筆跡は母の直筆と評している。

7. 医療器械図譜

東京 松本市左衛門 明治11  
492.8-Ir-1

明治初期には欧州より各種の医療器械が日本へ輸入されるようになった。この図譜は現存する最も古いもので、全国的に数冊が保存されているに過ぎない。

8. 生薬学

3巻 大井玄洞訳述 東京 英蘭堂  
明治13  
499.8-Sh-1,2,3

著者は金沢の儒医の末孫で金沢医学校製薬科を卒えたのち、東京大学医学部助教となり、ドイツ人教師の通訳の任にあたる。明治13年に愛知県医学校から金沢医学校へ転じたローレッツの通訳を務めた。大井は本書のほか「衛生汎論」など少なからざる訳書を公刊し、斯界に貢献した。

9. 治癩新論

小林廣著 東京 島村利助 明治17  
494.83-Ch

著者は明治13年東京大学卒業の医学士で、この時代は毎年20~30名程度の医学士誕生で、全国医学校からの招聘に応じきれなかった。小林は鹿児島、熊本、神戸と転任し、明治25年第四高等中学校医学部教授に就任する。本書は結核と同様に難治の癩に目を向けた注目の一書である。

10. 外科総論

木村孝蔵講述 学生版  
494.2-Ki-1

木村孝蔵は鯖江藩士の長男として出生し、長じて明治16年東京大学を卒業し、直ちに石川県甲種医学校の外科担当一等教諭として赴任し、以来、明治35年末まで在任し、医学校発展のために多大の功績を残した。本書は明治29~30年頃に学生達が講義録を一本にまとめたもので公刊書ではなく、貴重書の一つである。

11. 海都満大解剖図

Heitzmann 著 浅田決等訳 東京  
金原医籍店 明治34  
491.1-He-1

浅田並びに共訳した黒柳精一郎は、いづれも東京大学出身の医学士で第四高等学校中学校医学部時代の内科学を相ついで担当した。Heitzmannの解剖書は当時の日本では広く推奨され、訳書の初版は明治19年である。

12. 病理汎論

3巻 桂田富士郎著 東京 吐鳳堂書店  
(明治27~明治29) 1冊  
491.6-By-2

桂田は大聖寺藩士族の長子として生まれ、長じて明治20年石川県甲種医学校を卒業、

直ちに医科大学研究生となり、明治26年第三高等学校教諭となり、病理学を担当する。特に日本住血吸虫の研究で令名をかせ、大正7年に帝国学士院賞を受賞する。昭和21年故郷大聖寺で没する。

### 13. 解剖学名彙

鈴木文太郎著 東京 丸善 明治39

491.1-Ka-7

壮猶館の教師鈴木儀六の長子、明治21年東京大学を卒業し解剖学を専攻、同26年第四高等中学校教授に就任後ドイツ留学を終えて同32年新設の京都帝大の初代解剖学教授となる。本書は解剖学名彙の嚆矢となったものである。

### 14. 婦人病学

4巻 山田謙治著 東京 金原寅作

明治25～明治27 2冊

495.4-Fu-1,2

著者は明治20年東京帝大を卒業し、石川県甲種医学校教諭として産婦人科を担当する。同27年依願退官し、金沢市内止善堂病院を開く。のち初代石川県医師会長に就き医政に多大の功績を残す。

### 15. 胎生論 上巻

金子治郎著 東京 吐鳳堂書店

明治44 1冊

491.2-Ta-2

記念館

明治7年から同12年金沢医学館、金沢医学所に学ぶ。同14年東京大学で解剖学を研鑽する。同18年大阪医学校教諭、鈴木文太郎教授の京大転出に伴い、同29年四高教授となり、大正13年依願退職に至るまで解剖

学界に多数の後継逸材を育成した。著書は少ないが、本書は名著である。

### 16. 新纂外科各論

前編上下巻、後編上下巻 下平用彩纂著

東京 吐鳳堂書店 前編上下巻明治38,

後編上巻明治32, 後編下巻明治34 4冊

494-Sh-1,2,3,4

著者は明治22年東京大学を卒業、山梨県立病院長を経て明治30年第四高等学校教授となり、木村の後任として、北陸の外科学発展に寄与した。著書多数あり、また蔵書多数を寄贈し「下平氏蔵書」の印をみる洋書しばしばある。

### 17. 人体解剖学

5巻 石川喜直著 東京 吐鳳堂書店

明治41～大正4

491.1-Ji-1,2,3,4,5

初版は明治37

記念館

明治34年解剖学は二教授制となる。金子は大阪医学校時代の僚友石川を金沢へ招いた。石川は解剖学実習に長けて、教育者としてその名を永くとどめた。大正2年新設の北京医学堂に招かれたが、同5年病のため一時帰国した金沢で死去した。

### 18. 医化学実習

須藤憲三著 隈川宗雄関 東京 丸善

明治35 1冊

491.4-Ik-2

著者は東京医学院（私立）で修業し医術開業試験に合格した逸材である。東京大学隈川宗雄門下に入り医化学を修業し画期的な尿糖定量法を創始した。大正元年金沢医学専門学

校教授となる。同13年金沢医科大学長を併任する。本書は全国の医育機関で広く用いられ、昭和30年頃まで版を重ねた。

19. 組織学 第一巻

湯爾和著 東京 吐鳳堂書店 大正4

491.11-So

著者は中国浙江省生まれ(1878)で、明治40年金沢医学専門学校聴講生として入学、同43年卒業する。1913年(民国)中国人による国立北京医学専門学校が設立され校長に就任する。その後、医学を通じて日中交歓の主役を務め、度々来日した。

20. 実験細菌, 免疫及伝染病学 上巻

児玉豊治郎著 緒方正規校閲 東京

吐鳳堂書店 大正10

493.8-Ji

児玉は済生学舎を出た篤学の士である。明治32年東京医科大学で衛生学を修業するのちストラスブルグに学び細菌学を修め、大正4年金沢医学専門学校教授となる。晩年は東京で結核の臨床に心血をそそぐ。

21. 第四高等中学校医学部時代の講義録

記念館資料室

毛筆で和紙に書き綴ったものを一般に写本と称し、印刷本と区別している。それぞれの授業科目を書き綴った講義録の保存は少ない。なぜなら和紙は廃棄とはいえ、襖や屏風の下張りに再利用されて、姿を隠したからである。

金沢医科大学名誉教授

寺畑喜朔



## 第四高等学校

### 1. 中学東校西校

加賀藩校のうち、経武館は明治元年9月壮猶館に合併。明倫堂は、洋学を加えるなどの改定を経て、中学西校となり、壮猶館、道済館、致遠館、摺注館の洋学の系統は中学東校となる。中学東校は出羽町巽邸におかれ、摺注館・致遠館を合併して明治3年12月に開校した。翌4年6月英人サイモンソン着任。語学・数学・天文・史学等の普通学の修了者を法・理・文科の専門学に進ませるものであった。中学西校も明治3年12月に開校、明倫堂におかれ、皇漢学「四書五経、国史略、十八史略、日本外史、政記、日本書紀等」を教授した。翌4年7月の廃藩を経て同年10月教則改定が行われる（『石川県史料第二巻』（1972））。皇漢学に洋学と算学・洋算を新たに加え総合的な基礎教育とし、さらに「中学洋算学科」と「仏学変則寮」に専門学科を設置する構想である。これに関して「中学西校教則は漢学のみを以て同四年十月廃して普通学科に更定したるも尚不完全なる所あるを以て中学東校を合併し更に中学校と改称普通専門貳課となし」（戸水信義『石川県教育沿革史料中異同の件取調書』1886）との記述がある。金沢中学校の成立はこの構想の延長であり、東西両校の併合というより、西校（＝明倫堂）の拡充ととらえられる。

### 2. 金沢中学校

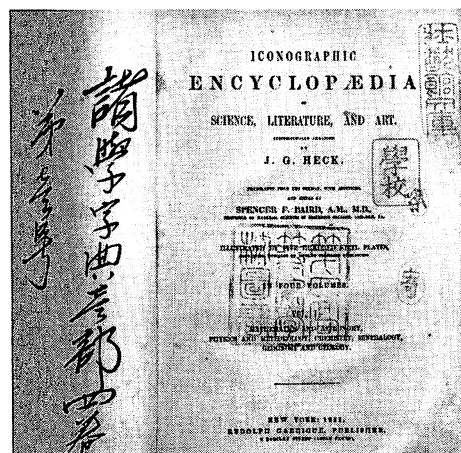
明治4年11月15日、金沢中学校が発足する。内田大参事は開館式に臨み告文を朗読。その中で皇漢洋の三学の併合、四民教導を標

榜し、本校で学んだ人材を「異日国家の用に供せんと欲す」と述べている。

「金沢学校学課表」（『金沢学校改正規則』、明治4年、石川県立図書館蔵）によれば、「普通学」を基礎教育とし、普通学修了者を政治学法科理科文科の「専門学」に進ませ専門教育を行うというものである。普通学は年少者への「小学課業」を含み英仏の語学教育を行う点が注目される。

また「金沢学校学課表」には、等級により使用される書籍が示されている。

1. Iconographic Encyclopaedia of Science, Literature and Art.  
by J.G.Heck.  
New York, 1851-1852 6vols.  
「諸学字典 老部 四巻」墨書  
「壮猶館文庫」「学校」  
「第四高等学校図書」印  
四高 1-20-15



諸学字典蔵書印

明治4年11月15日に行われた金沢中学校開館式の模様は「中学校開館式大綱（『金沢学校改正規則』石川県立図書館蔵）に詳しい。

同年9月に着任した内田大参事の告文のあと、

祝砲17発、一統に赤飯酒肴。当日の参列者は「奏任、判任並に教官出仕等」「外国教師」「中学生徒」「小学十一カ所、医学、理化、鉱山生徒」と、当時金沢にあった全ての教育機関に関わるもの2903人、その他「砲兵」「留書、取次、小丁」「木戸番、料理方」が273人、合わせて3176人である。「万国地図、インサイコロピテー、天地両球、渾天儀、三星組立、セキスタント、ヲクタント、望遠鏡、陸蒸気様式、蒸気車様式、コロンメートル、エレキテル、バルンメートル、テルモメートル、

其外究理舎密の器械等」の「飾物」が展示された。

開館式当日の「飾物」に供された「インサイコロピテー」は、また、「学課表」に専門学—文科—西洋学で使われる「西洋原書」としてあげられている。「西洋原書 当時在合の書目を挙」とあり、「学課表」に掲載されている洋書は金沢中学校設立のために新たに購入されたものではなく、旧藩時代からのものを転用したと思われる。「壮猶館文庫」印がある。

#### 蔵書印

国史略 5巻 巖垣松苗著 皇都 五車楼  
安政4年 5冊

「長町小学所」「金沢学校」

「第四高等中学校」印

四高4-23-16

「長町小学所」の蔵書印がある。明治3年1月金沢藩は中学と小学所を設けた。中学は東西2校、小学所は卯辰山・小橋・梅本町・高岡町・河原町・小立野の6校である。この藩立の6校に民間の設立によるものを加え、小学所は、廃藩までには小橋・梅本町・高岡町・河原町(堅町)・小立野(のち出羽町)・百々女木・石引町・小将町・材木町・柳町・長町の11校になっていた。小学所では、明倫堂の素読生に相当する7、8才から14、5才、が在学。孝経、大学、論語、孟子等の素読、小学、国史略、十八史略等の講義を行った。

明治5年4月旧藩立の全ての学校が閉鎖され、小学所は5年8月「石川県区学校規則」により「区学校」に、区学校は同年同月の学制により、翌6年3月「小学校」と改称される。

「国史略」は「金沢学校学課表」,「正則—小学課業—一等」に挙げられている。

十八史略 7巻 曾先之著 皇都 松柏堂・五車楼 元治1年 7冊

1巻に「小立野小学所」「出羽町小学所」「金沢学校」「第四高等中学校」印

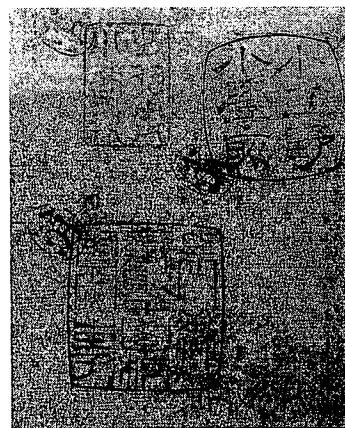
2巻に「学校」褐色印,「長町変則中学校学事」

印,「金沢学校」「第四高等中学校」印

3巻以降に「小立野小学所」「出羽町小学所」

「長町変則中学校学事」印,「金沢学校」「第四高等中学校」印

四高4-32-41



十八史略蔵書印

「小立野小学所」は明治3年11月に6校の金沢藩立の小学所のひとつとして飛梅町の民家におかれ、明治4年2月出羽町に移転,「出羽町小学所」となる。

明治7年1月長町旧長氏邸に長町小学校が設けられ、同年8月長町変則中学校となる。9年1月廃止、啓明学校に統合される。「長町変則中学校学事」印はこの約1年半の間につけられたものであろう。

「十八史略」は変則中学校「下等一第六・五・四級一史学」で用いられた。

本展では、多くの書籍に「金沢学校」「学校」「加州蔵書」等の蔵書印を見いだすことができる。「金沢学校」印の「金沢学校」が何を指すかについては、以下の3説がある。

(1)明治4年11月から明治5年4月まで存続した金沢中学校を指す（園部昌良「金沢学校蔵

版の明治辛未聚珍版」『石川郷土史学会会誌第4号』1971）。

(2)加賀藩校明倫堂を指す（山森青硯『金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録』1981）。

(3)壮猶館（安政元年）に始まる維新前後に金沢で起伏した諸学校の総称。あるいは、藩または県が購入した書籍に「金沢学校」「学校」「加州蔵書」等の蔵書印を捺し、管内の諸校に配布したとみる。（藤井信英「金沢学校考」『北陸英学史研究第3号』1989）。

明治7年版の「幾何初学」、9年版の「万国新史」に「金沢学校」印があることから、(3)の説が妥当であろう。

## 2. 気海観瀾広義

15巻 ボイス著 川本幸民訳 江戸

稲田佐兵衛 安政2年 5冊

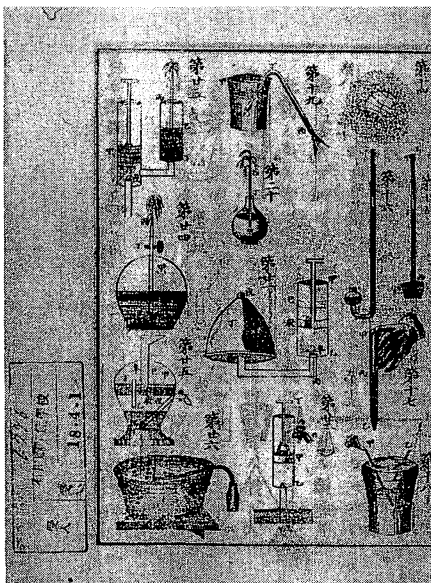
「金沢学校」「石川県尋常師範学校」

「石川師範学校図書印」

「金沢学校学課表」

「中学課業一変則一三等一理化」

師範蔵書



気海観瀾広義

## 3. 地球説略

3巻 禎理哲著 箕作阮甫訓点 東都

老尙館 万延1年 3冊

「金沢学校」「第四高等中学校」印

四高5-22-21

## 3. 英学校、巽中学校（巽変則中学校、巽変則専門学校）

明治5年2月、県名を石川県と改称。4月政府は学制の公布を前に旧藩以来の諸学校廃止令を出し、金沢中学校を含む全ての学校が閉鎖された。

翌6年1月石川県は仙石町旧明倫堂に変則学校と出羽町旧巽邸に英仏学校、5月旧巽邸に変則専門学校を設立、金沢中学校閉鎖による学業半ばの者に継続の道を開いた。「従来此学に志し且小学の書目等粗卒業の者を撰んで」入学させた。明治7年5月、英仏学校は仏学を廃し、英人ランベルトを招き語学教師とした。

明治7年8月長町小学校と仙石町変則学校をそれぞれ長町及び仙石町変則中学校とした。明治7年9月旧巽邸英学校内におかれていた集成学校・付属小学校と仙石町変則中学校を交換移転した。これにより旧巽邸の変則中学校と変則専門学校は巽中学校と呼ばれる。

明治7年8月29日に変則中学校規則と変則専門学校規則が出されている。これによると、変則中学校は「小学を経たる生徒に普通の学科を教ふる所なり」と中等程度に相当し、「書器等未だ備わらず在来の書によりて」教授し、課程も不完全な「変則」的な機関であるとしている。

「変則専門学校規則」にも「其の書籍未だ備はらず其の教員も未だ得る能ず」、「古今の書を斟酌し」と現状を述べ、その上で「各其才を成し以て国家の用に供せん事を」と政府の興学の意に沿う意向を示している。

変則専門学校は法律科、産業科、算術科の3科とし、それぞれ中等程度の3年の予科と、科によって2年から4年の本科をおいた。

明治7年8月の変則中学校規則と変則専門学校規則には学科と等級による書籍が挙げられている。（『石川県資料第二巻』p204）その後明治8年11月「中学校規則及び中学専門科教則改正」があり、「巽専門法律科業教則等級表」として書籍が記されている（同上p278）。以下は明治8年11月の「等級表」による。

#### 4. 棠陰比事抄

上-上下, 中-上下, 下-上下巻  
桂万栄編集 6冊  
「金沢学校」「第四高等中学校」印  
四高3-10-43

5. 無冤録述 上下巻 (元王與著) 東都  
崇文堂 前川六左右衛門 (明和5年)  
寛政11年 2冊  
「金沢学校」青印, 「第四高等中学校」印  
四高3-10-73

#### 4. 啓明学校・中学師範学校

明治9年2月, 石川県は英学校, 巽中学校 (巽変則中学校と巽変則専門学校), 長町変則中学校, 大聖寺変則中学校 (明治8年3月設置) を廃し, 「県文物の煥發啓明」を設立の主意とし啓明学校を設立した。設置場所は, 旧巽邸を離れ仙石町とした。

石川県学務課勤務十等出仕野村彦四郎を校長 (石川県師範学校長と兼任), 三等訓導百束誠助を副校長 (石川県師範学校訓導と兼任), 「文運未だ開けず且教科書に乏しきが故に洋人を用いて以て教長と為すものなり」とし, 英人ランベルト (明治7年英学校に招聘) を教長とした。

「校則」には「師範学校中学校の教員たるべき者或いは本県文物のために洋書を訳しまたは多少外国人の通弁を為すべき者を養成し以て官下一般の知識を啓明せん事を目的とす」とあり, 目的として中等教員養成を「文物の啓明」に並立させている。この頃小学校制度が一応形成され, その次の課程である「中学校」の設立が待たれていた。当時県下には英学校と巽中学校 (巽変則中学校と巽変則専門学校) があったが, これらはあくまでも暫定措置であり, 正則の中学校とは呼べるものではなかった。そこでまず中等教員を養成することにより公立中学校の創設を図ったのである。

「教則は中学師範学科を模倣」して作られ

た。「中学師範学科」は、明治8年に東京師範学校内に設置された中等教員養成コースである。東京師範学校ではこの課程が主体となり、やがて東京高等師範学校へ発展する。

啓明学校では学科を洋書を主とする甲部と国書訳書を主とする乙部に分ち、各部につき修業年限を下等2年上等2年の4年とした。甲部は英学校、乙部は巽中学校の延長であった。入学資格を「小学全科卒業の証書を所持する者」と緩く規定してあるが、甲部では教科書として原書を多くあげ、「外国人教師の伝習」の時間がとられている。外国語の重視は「中学師範学科」の影響であろう。

明治10年7月に校名を中学師範学校と改め、中等教員養成を前面に出した。明治11年米人ウィットニーを教長とし、12年には米人ウィンとトルウを招いた。しかし公立中学校設立には至らず、さらに「学生の気向大に進歩し〜各自所長の学科を専修し他日の大成を期せんと欲するもの多きを致せり」（「明治十四年石川県年報」『文部省年報』1882）という状況であった。そこで当初の目的を改め「英才俊秀の士を養成する純然たる法理文の専門学校となさんと」（同上）し、明治14年7月石川県専門学校と改称した。

当時金沢にあったもう一つの専門教育機関である金沢医学校では、明治13年に外国人教師を廃して医学士外山林介・伴野秀堅、理学士今井省三を採用するが、中学師範学校でも、明治14年5月からは外国人教師に代わって東京大学法学士1名を聘している。

明治9年2月の「石川県啓明学校規則」の「教科表」（『石川県史料第二巻』p309）は同年8月29日と（同上p321）12月8日（同上p343）に改正されている。改正規則に書籍名が示されている。

6. 泰西史鑑 上編10巻 勿的爾著 西村鼎重訳  
求諸己齋蔵梓 明治2年 10冊

中編10巻 物（ママ）的爾著 西村茂樹訳  
求諸己齋蔵梓 明治5年 10冊  
「石川県啓明学校」「第四高等中学校」印  
乙部-下等-史学  
四高4-40-41

7. 弗氏生理書 7巻 弗知遜（ホユチソン）著  
坪井為春、小林義直訳 東京 文部省  
明治8年 7冊

「石川県啓明学校」「第四高等中学校」印  
乙部-上等-生理学  
四高11-20-23

8. 「クートレッチ氏英国史或ハ仏国史」

A Pictorial History of England.

by S.G.Goodrich. Philadelphia, 1870

「学校」「金沢学校」「第四高等中学校」印  
「具氏英国史」墨書

四高4-33-13

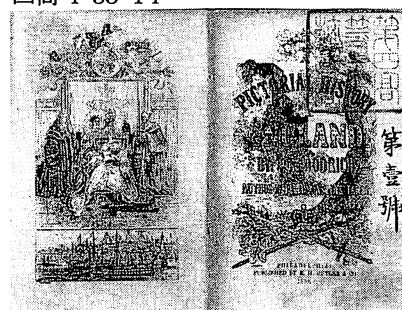
A Pictorial History of England.

by S.G.Goodrich. Philadelphia, 1870

「金沢学校」「加州海軍局文庫之記章」  
「第四高等中学校」印

甲部-上等-翻訳科

四高4-33-14



クートレッチ氏英国史

## 5. 石川県専門学校

中学師範学校時代後半（明治13年4月）に法理文の専門教育機関としての基礎ができ、明治14年7月石川県専門学校と改称、予備科3年、本科3年の高度の専門教育機関として安定する。引き続き教員として学士が採用される。

第五代第四高等学校長・北条時敬（ときゆき）の日記が収められている『廓堂片影』1931には明治19年「四月三十日 武部氏（武部直松石川県専門学校長）を訪ふ同氏本間、田

上、今井及余四人に対し中学教授及県下の公益の為尽力する様県令の内意を通達す」との記述が見られる。若き学士達に寄せる期待の大きさがわかる。彼らはまた翌明治20年に金沢に設置されることになる高等中学校の誘致にも積極的な動きをする。日記には、「五月廿一日 田上本間二氏と県令を訪ひ高等中学の位置に付大学教授に親接依頼する為校長上京の必要を進言す」から「十一月三日 大樋端に河瀬氏（河瀬貫一郎県会議長）等帰県を迎ふ」まで、高等中学校誘致運動に関わった様子が記されている。

### 北条時敬と西田幾多郎

第五代第四高等学校長・北条時敬と哲学者・西田幾多郎はともに石川県出身、その師弟関係はよく知られている。両者の履歴は明治初期の石川県の教育事情を示していて興味深い。

北条は明治6年から3年間英学校で英学・数学を学び、明治9年2月啓明学校発足に伴い同校に入学、漢学・数学・英学を修める。明治11年県費留学生として上京、明治18年東京大学理学部数学科を卒業、帰郷して石川県専門学校の「二等教諭」に任ぜられる。この時文学士本間六郎、法学士田上省三も来任している。

一方西田は明治16年石川県師範学校に入学、翌17年予備科を経て本科6級を修了後病气退学している。明治19年7月「石川県専門学校附属初等中学科第二級」（『職員履歴第一集』文法経済学部事務部蔵、予備科第二級のことか）に入学。明治20年4月石川県専門学校は官立に移管し第四高等学校となる。専門学校の生徒は入試を受け、相当の級に編入した。

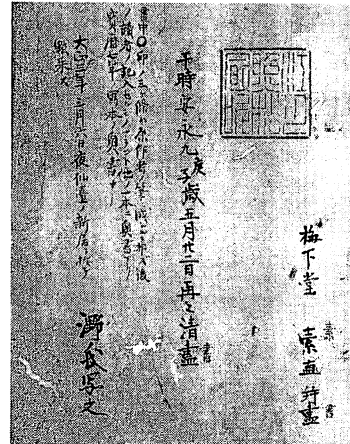
西田は「予科第一級二入学」、明治21年9月本科に進学する際（当時は予科3年本科2年）、北条は数学を勧めたが、西田は本科一部(文科)、哲学への道を選ぶ。同時に北条は第一高等中学校に転任、金沢を去る。西田は明治22年理科へ転科、翌23年「病气二由り」退学する。北条は退学を諫める手紙を出している。「先学年には貴君は甚だ欠席多く、其の為不覚の落第被遊候段、不得止次第に有之候」（『廓堂片影』1931明治23年5月18日付西田宛書簡）。

石川県専門学校に始まる師弟関係は終生にわたって続いた。北条が自身の勤務校である山口高等学校・第四高等学校に西田を呼び研究の機会を与えたことは、西田の生涯に大きな影響をもたらした。西田は、北条の死後、遺稿、書簡、蔵書目録等をまとめた『廓堂片影』を編集している。

北条は、古書とりわけ写本の収集につとめた。「殊に日本近世史の資料として珍重すべきものが多かった」（『廓堂片影』）。必ず通読し、

写本では異版異筆との校合，読みを加筆，さらに考証を行った。後に北条の蔵書の一部は四高に寄贈され「北条文庫」をなすが，写本には彼の朱筆が残っている。

朱筆の日付は大正3年，  
東北帝国大学総長時代のものである。



『石川県史料第二巻』に石川県専門学校学科課程表に教科用書が記されている。(p691) これらの書籍には「石川県中学師範学校」印あるいは「石川県専門学校」印がある。「第四高等中学校」印は明治21年に官立に移管されたときのものである。

洋書の検索は CATALOGUE of BOOKS in the LIBURARY of DAI-SHI-KOTO-CHUGAKKO (1894, 本学附属図書館蔵) を参考にした。

9. ギーカイ氏地文学  
Geology. by A.Geikie. London, 1876 (Science Primers)  
四高 11-63-9「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印  
四高 11-63-10「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印,  
「地質学初歩」墨書・鉛筆書き

10. ミール氏経済学  
Principles of Political Economy.  
by J.S.Mill. London, 1880  
四高 3-52-60「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印,  
四高 3-52-61, 11-c-2  
「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印,

Essays on Some Unsettled Questions  
of Political Economy.

- by J.S.Mill. London, 1877  
四高 3-51-13「石川県専門学校」印,  
「第四高等中学校図書」印

11. ベーン氏修身学  
Mental and Moral Science Theory  
of Ethics and Ethical Systems.  
by A.Bain. London, 1879  
四高 2-72-4「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印,  
四高 2-72-5「石川県中学師範学校」印,  
「第四高等中学校図書」印,  
「修身学」鉛筆書き

- ベーン氏心理学  
Mental and Moral Science Psychology  
and History of Philosophy  
by. A.Bain. London, 1879  
四高 2-51-3「石川県専門学校」印,  
「第四高等中学校図書」印

## 6. 第四高等中学校

森有礼は，明治19年の帝国大学令で，東京大学を「国家の須要に應ずる」ための帝国

大学に改編した。中学校令では、中学校を公立の尋常と官立の高等に分け、高等中学校に帝国大学進学への予備教育を行う本科と、分科として医学部・薬学科・法学部・工学部などの専門学部を置いた。

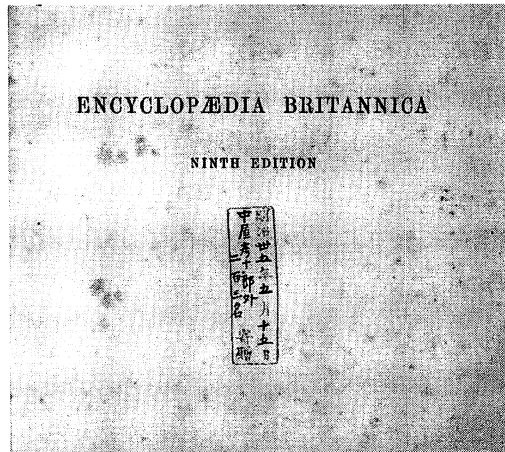
高等中学校は、全国を5つの学区に分ち、帝大へ進学する人材を集めようとするともに、地域の高等教育をも担う機関と位置付けられ、設置場所は、東京大学予備門、大阪の大学分校をそれぞれ改称した東京（第一高等中学校）、京都（第三高等中学校）と、文教の伝統のある旧雄藩である仙台（第二高等中学校）、金沢（第四高等中学校）、熊本（第五高等中学校）が選定された。

明治20年4月18日の第四高等中学校の設置により、石川県専門学校は敷地、校舎、その資産等をこれに移管した。石川県専門学校の生徒は相当の級に編入した。同年8月には石川県甲種医学校も併合し、専門学部としての医学部とした。また、明治22年3月には、全国ではじめて第四高等中学校医学部に薬学科が置かれた。

第四高等中学校の設置について田中鉄吉は、「寛政四年開設以来九十六年其間多少の改変ありしと雖も、命脈を続きし学校も爰に至て一区期を画す」（田中鉄吉『郷土数学』1935）と語る。加賀藩校が変遷を経て石川県専門学校に至ったとの認識が興味深い。

## 7. 第四高等中学校開学式のブリタニカ

12. Encyclopaedia Britannica. London, 1875-1889 (9ed. 25vols.)  
四高 1-20-14



「中屋彦十郎外 203名寄贈」

文部大臣森有礼は明治20年(1887)10月26日第四高等中学校の開校式に臨み、次いで議事堂で郡区長県会議員に演説、さらに金沢工業学校の開校式に臨席した。その日の最後に訪れたのは兼六園内の石川県勸業博物館である。視察後、館内で「地方有志者」による高等中学校の開校を祝賀する宴席に列した。「会する者無慮六百名」。有志代表森下森八の朗読がある。「英国倫敦新刊の『エンサイクロピヂアブリタニカ』一部を第四高等中学校に納め、永く今日の記念と為さんと欲す。閣下森八等の微志を察し之を聴されば何の幸か之に如かん。」これに対する大臣の答辞は、市民の篤志に謝意を示し、「凡そ事業を起こし憤励の気焰一時は旺盛なるも、永遠に之を保持する困難は世の常なり希望くは諸君此の通患に流ることなく終始高等中学校の完全ならんことに助力し、延て全県教育の盛況に至らんことを」と、今後の支援をも要請している。「永く之を教育上の実用に供し、以て諸君の篤志を満足せしむべし」。（「文部大臣学事巡視随行日記」『教育報知』第126号 明治21年7月7日発行、第127号 明治21年7月14日発行）



ブリタニカは附属図書館「四高蔵書」に保管されている。第1巻が1875年（明治8年）発行、最終巻であるインデックスは1889年（明治22年）発行であるから、開学式の後も完結していない分の寄贈が行われたらしい。

実物に記されている寄贈印には、「明治35年5月15日 中屋彦十郎外203名 寄贈」とある。附属図書館に保管されている、四高図書の受入原簿とも言うべき「支給命令書」のうち『洋書 第一門支給命令書』には、「エンサイクロピヂヤブリタニカ箱台共 巻部 25冊 中屋彦十郎外二百三名寄付」とある。記帳の日付が明治35年5月14日、命令官の欄に四高第五代校長北条時敬（在職明治31年～35年5月）の認め印があることから、登録は遡ってされたものと思われる。

森下森八と中屋彦十郎は共に、加賀藩の家柄町人の出で、当時の実業家・政治家。森下は文久元年生まれ、尾張町の菓子製造業。中屋は、三浦孝次『加賀藩の秘薬』1969には明治25年現在39歳とある。南町の菓種業。明治11年の明治天皇北陸巡幸の際、邸を行在所に提供した。

『第四高等中学校一覧』の「沿革略」の章にブリタニカの記述が出てくるのは開校3年目の明治22年からである。その後毎年同じ文が記載されている。「同月廿六日開校式を執行し文部大臣子爵森有礼之に臨み尋て本校の敷地に充つべき地所を見分す。同日有志者若干名より「エンサイクロピヂヤ、ブリタニカ」一部を本校に寄付し以て本校を金沢に置き且今回大臣巡視の記念と為す」

ブリタニカは四高の終末期近くでは貴重書として扱われた。「おそらく図書館の宝物ではなかったろうか。閲覧室のすぐ見える、高

い高い棚に並べられていたので、容易に手に触れることはできなかった。」（正橋剛二『北辰詞華集』1990）正橋氏は昭和25年卒、四高最後の卒業生。

資料館 在田則子

## 石川（県）師範学校

### 1. 学制期(1) 石川県集成学校, 石川県師範学校

明治3年11月金沢藩は四民教導のため中学と小学所を設けた。中学は東西2校、小学所は卯辰山、梅本町などの6校である。小学所は民間の設立によるものを加え翌4年末には11校になっていた。明治5年4月旧金沢藩で設置された諸学校は全て閉鎖された。小学所は明治5年8月「石川県区学校規則」により7校の区学校となったが、同年同月に公布された学制に準拠し、翌6年2月、小学校と改称した。その7校合同の開校式が仙石町「旧学校」（旧明倫堂）で行われている。この後、小学校数は、明治6年8月までに加賀2郡に22校、能登4郡に19校、明治6年12月までに加賀4郡に39校、明治7年12月までに加賀4郡に109校、能登2郡に21校（『石川県史料第二巻』）と著しく増加し、小学校教員の急需を招いた。

明治7年7月石川県集成学校の開校に先立ち生徒募集が行われた。その際の「生徒入学心得書」に「今般師範学校卒業生徒の派出を文部省へ請ひ即ち当校訓導とし師範学校の規制を模擬し小学教員を養成せんとす。」とある。学制公布に合わせて明治5年に東京に設けられた文部省直轄の「師範学校」をモデルとし、同校卒業生百束誠助を指導者として、最初の教員養成が始まる。

定員60名は、既に小学校教員である者15名・管内各区から1名宛選出された者・志願生10名からなった。

開校式は明治7年8月に行われた。石川県

令内田政風の開校告文には「邑に不学の戸なく家に不学の人なく」と「被仰出書」の一節が繰り返されている。

集成学校は下石引町旧巽邸、石川県英学校を区画して設置されたが、同年9月に仙石町に移り、11月石川師範学校と改称された。

同年12月の師範学校教則によれば、3級を3ヶ月ごとに昇級し全科終了後、附属小学校で3ヶ月の実習をした。師範学校では「多少漢籍や国学稀には算術を学んで居たもの」（石川太郎次「四十年前の回顧」『石川教育』133号大正4年）、「漢籍力は相当にあれども数学の力に乏しきもの」（湯浅尚志「経歴の一斑」『石川教育』157号、大正6年）等、ある程度の教養を既にもつ者に学業の不足を補う講習が行われたようである。

実際演習では、学制により初めて導入された一斉教授法が指導された。「『いろは図』『単語図』『聯語図』といった掛図をかけ、それを鞭でさし『い』と教え、次に生徒の一人をさし『あなた』と指名するとその生徒は『い』と復唱する。次にまた一人。三人ほど復唱させてから、百束先生が『ご一緒に』という、大きな一年生たちが一斉に『い』...」（『石川県師範教育史』）。「大きな一年生」である生徒の年齢は様々で、最年少は18、9歳、20代後半が多く、40歳を過ぎた者もいたという。同時に下等小学師範科の速成教則が制定された。「小学教則を一定せんが為其の教員を要する甚だ急なり」と学制の実施に伴う小学校の急増に対応する、3ヶ月の速習コースである。

明治7年の師範学校教則には、次の書籍が記載されている。

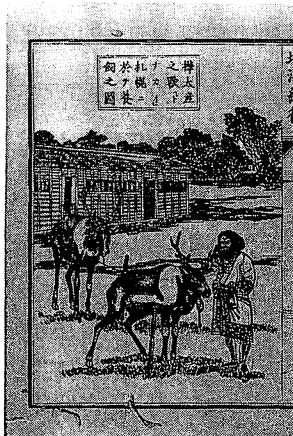
1. 北海紀行

5 卷付録 1 巻 林頭三編 河崎曾平閱

金沢 如蘭堂 明治 7 6 冊

「石川県尋常師範学校」

「石川師範学校図書印」



北海紀行

2. 格物入門

7 巻 丁躰良著 本山漸吉訓 東京

明親館 明治 2 7 冊

「石川県師範学校蔵書」

「石川県尋常師範学校」

「石川師範学校図書印」

3. 格物入門和解

5 編 丁躰良 (マルチンウキリヤム) 著

柳河春蔭和解 東京 北門社 明治 3 年

1 2 冊

「石川県師範学校蔵書」

「石川師範学校図書印」

4. 西洋事情初編

3 巻 (1 欠) 福沢諭吉著 明治 2

3 冊 (1 欠)

「石川県師範学校図書」

「石川師範学校図書印」

5. 校刻日本外史

2 2 巻 頼山陽 (久太郎) 著 保岡元吉校

元治 1 1 1 冊

「学校」青印「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

6. 日本政記

1 6 巻 頼山陽著 大阪

田中太右衛門他 明治 1 3 8 冊

「石川県尋常師範学校」

「輪島小学師範学校」

「石川師範学校図書印」

7. 増訂化学訓蒙

8 巻 石黒忠恵訳纂 東京 英蘭堂

明治 6 8 冊

「ヒルセル氏著化学問答を基とし諸家殊に

シカラム氏著化学書より採補」

「石川県師範学校蔵書」

「石川県尋常師範学校」

「石川師範学校図書印」

## 2. 学制期(2) 石川県師範学校, 石川県第一師範学校

明治 9 年と 1 0 年に師範学校規則改正が行われ, 1 8 歳以上 3 5 歳まで (女子は 1 7 歳以上 4 0 歳まで), 「尋常普通の書を購読し得且数学を学び得たる者」を入学資格とし, 修業期間 2 力年, 学力不足のものに予科をおいた。

明治 1 0 年の改正には入学試験の方法が記されていて興味深い。石川県師範学校では「日本外史の叙事に点を加え盤上に記載し和訳せしむ」「十八史略国史略を讀, 且講せしむ」

「四則雑題と雑式各二題」。これで「尋常普通の書を購読し得且数学を学び得たる者」を選別し、本科予科に振り分けたようである。女子師範学校の入学試験は「題を与え通用書牘を作らしむ、この際習字の巧拙を見る」「物理階梯日本地誌略を読且講せしむ」「四則雑題雑式各二題」。女子師範では明治9年の規則にあった「尋常普通の書を購読し得且数学を学び得たる者」の条項は削除されている。女子の志願者が少なかったためだろうか。

明治9、10年の規則に記されている書籍は次のようである。

#### 8. 泰西国法論

4巻 ヒッセリング講義 津田真一郎訳

開成学校 大阪 三木佐助 慶応4

4冊

巻1、2「石川県師範学校蔵書」

「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

巻3「金沢学校」

「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

巻4「石川県啓明学校」

「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

#### 9. 帳合之法

4巻（初編2、二編2）

ブライヤント、スタラットン著

福沢諭吉訳 東京 慶應義塾出版局

明治9 4冊

#### 10. 生理発蒙

13巻（13巻欠） リバック著

島村鼎訳 江戸 須原屋伊八 慶応2

13冊（13巻欠）

「金沢学校」

「石川県師範学校之印」

生理発蒙図式

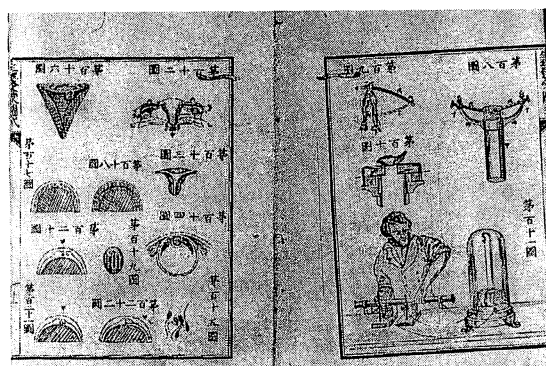
1巻 1冊

「金沢学校」

「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

「石川師範学校図書印」



生理発蒙図式

#### 11. 英氏経済論

6巻（789巻欠） 英蘭土著

小幡篤次郎訳 東京 小幡篤次郎

明治6 6冊

原書は「ポルチカルエコノミー」

Wayland, Francis

「金沢学校」

「石川県第一師範学校蔵書」

「石川県師範学校之印」

「石川師範学校図書印」

#### 12. 学校通論

9巻（1・2欠） 箕作麟祥訳述 大阪

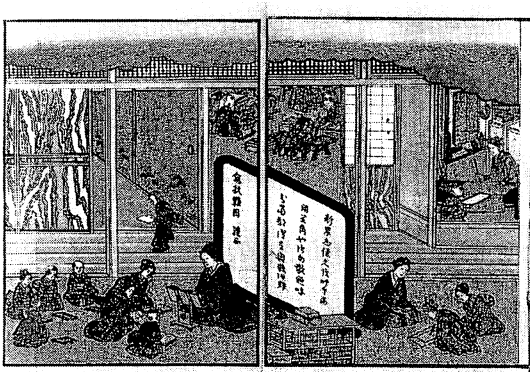
岡島真七翻刻 明治15年

9冊（1・2欠で7冊）

「石川県師範学校」  
「石川県師範学校之印」  
「石川県師範学校図書印」

### 13. 女のさとし

1巻 藤田維正著 金沢  
石川県学校蔵版 明治7 1冊



女のさとし

### 3. 教育令期 石川県第一師範学校、石川県金沢（女子）小学師範学校

明治12年9月中央集権的な教育制度を全国画一に実施しようとした「学制」への批判から、学制を廃し「教育令」が公布された。大学区中学区等の学区を廃し、小学校の設置・就学義務を緩和した。これにより、学制の実施によって一応成立した初等教育が衰退の傾向を見せた。

しかし、翌13年12月には「改正教育令」が出され小学校の設置・就学義務を再び規定、強制主義がとられた。これに従い石川県では明治14年8月「石川県学事通則」を制定した。百ヶ条近くの詳密な規定である。同時に同年5月の「小学校教則綱領」による「石川県小学教則」が出された。小学校を初等中等高等の三科に分け各科の教科内容を規定、各

段階における週あたりの時間数、教科用書などの表を示している。引き続き明治14年8月「師範学校教則大綱」が制定され、師範学校の学科構成・教育内容を国家規模で制度化した。石川県ではこれに準拠し明治15年8月「石川県師範学校規則」を改正した。先の「小学校教則綱領」「石川県小学教則」に連動するもので、初中高各科の教員たり得る小学高等科の教員養成を行い、入学資格を17歳以上、小学高等科卒業または入試によってその学力ありと認められた者、修業年限3カ年などとした。これも教科内容、週あたり時間数などを詳細に規定してある。「師範学科教授用書一覧」に書名が示されている。

### 14. 改正新撰数学

上下巻と別冊解答 関口開撰 金沢  
栖遊舎 明治11年 2冊  
「石川県師範学校之印」  
「石川県師範学校図書印」

### 15. 幾何初学例題

1巻 関口開編輯 金沢 衍象舎  
明治14 1冊 和  
「石川県第一師範学校蔵書」  
「石川県師範学校之印」

### 16. 幾何初学

4巻 達必斯著 関口開訳 金沢  
石川県学校用出版会社 明治7年 2冊  
1・2巻 「第一師範学校印」  
「石川県師範学校図書印」  
3・4巻 「金沢学校」  
「石川県師範学校之印」  
「石川県師範学校図書印」

17. 改正点竄問題集

上下巻（下巻欠） 関口開著 金沢  
臥龍房 明治9年 2冊（下巻欠）  
「石川県女子師範学校印」  
「石川師範学校図書印」

18. 代数学

上巻 答毒翻多著 関口開訳 金沢  
益智館 明治10年 1冊  
「石川県第一師範学校蔵書」  
「石川師範学校図書印」

<p>関口開</p> <p>天保13年松原信吾の第4子として金沢に生まれる。安政4年関口甚兵衛の養嗣子となり、文久3年家督を継ぎ、藩の算用場に勤める。安政4年和算家瀧川秀蔵の門下となり、文久4年免許皆伝、指南目録を受ける。文久2年、加賀藩は七尾軍艦所を設け、航海術、数学教授として長州藩士戸倉伊八郎を招いた。関口は戸倉を通じて西洋算法に初めて触れる。幕末の動乱期、関口は加賀藩士として「藩命を奉じて四方に奔走」（上山小三郎・田中鉄吉『関口開先生小伝』1919）、明治元年の北越戦争では「大小荷駄方主任」（『金沢市教育史稿』）として従軍した。その間英語を独習し、明治2年からは藩や県の教育機関に籍を置き、次々と英米数学を紹介した。</p>	<p>主附兼務</p> <p>明治5年8月 区学校二等教師 （明治5年4月旧藩設立の諸学校廃止につき、小学所廃止。同年8月区学校を設ける。）</p> <p>明治8年7月 師範学校教諭 監事兼務 （明治7年8月初の教員養成機関として集成学校設立。同年11月師範学校と改称。）</p> <p>明治9年2月 啓明学校在勤 監事兼務 （明治9年2月変則学校変則専門学校英学校を廃して啓明学校設立）</p> <p>明治10年7月 中学師範学校三等教諭 （啓明学校改称）</p> <p>明治13年8月 石川県専門学校在勤 （中学師範学校改称）</p>
<p>関口の履歴（『関口開先生小伝』）は初期の石川県近代教育史そのものである。（ ）は筆者注。</p>	<p>明治14年12月 石川県専門学校三等教諭兼 金沢師範学校三等教諭</p>
<p>明治2年5月 洋算五等教師 （「挾注館系統の教師」との記述がある。吉村政行「四高の前身の前身」『同窓会報第三号』第四高等学校同窓会、昭和2）</p>	<p>明治15年9月 石川県専門学校三等教諭に専任</p> <p>明治17年4月 43歳で没</p> <p>著書で刊行されているものは以下で、全て「師範蔵書」に含まれている。</p>
<p>明治3年11月 文学訓導 総小学校算術規則</p>	<p>数学問題集 点竄問題集 新撰数学 幾何初学 算法窮理問答 代数学 幾何初学例題</p>

19. 物理全志

10巻 カツケンボス著「ナチュラルフィロソフィー」とガノー著「ナチュラルフィロソフィー」による  
宇田川準一訳 諸葛信證出版 東京  
煙雨楼 明治8年 10冊 23cm 和

「石川県師範学校蔵書」  
「石川師範学校図書印」

20. 弗氏生理書

7巻（1欠） 弗知遜（ホユチソン）著  
坪井為春、小林義直訳 東京 文部省

明治8年 7冊 22cm

「石川県第一師範学校蔵書」

「石川県師範学校蔵書」

「石川師範学校図書印」

#### 21. 中学植物学

初編後編 能勢栄訳纂 明治12年

東京 能勢栄 3冊 18cm

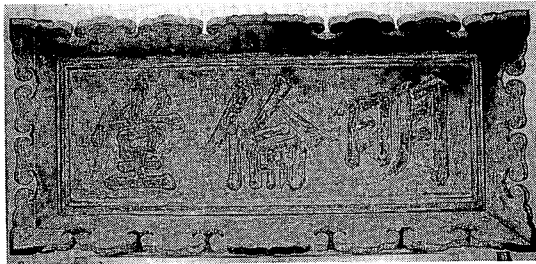
ウード著植物学に依りユーマン氏及び他

の植物学の書を折衷参考

「石川県金沢師範学校図書記」

「石川師範学校図書印」

#### 4. 「明倫堂」「経武館」の扁額と師範学校



明倫堂

撮影・宮村成信氏

集成学校は明治7年8月旧巽邸英学校内に設置された。明治7年10月、仙石町小学校を集成学校の付属学校とするため旧明倫堂跡の変則中学校と交換移転した。旧明倫堂を校舎としたこの時点から、「明倫堂」の扁額は、師範学校のシンボリック的存在になる。11月、集成学校は石川県師範学校と改称する。

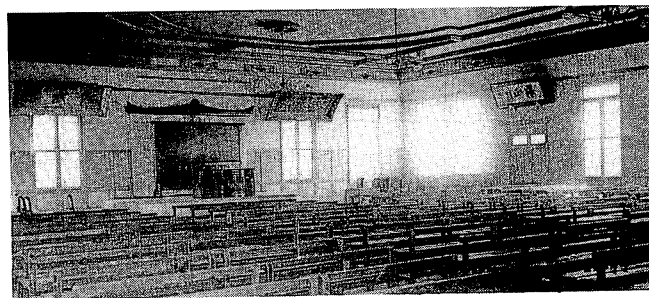
明治10年2月、広坂通6番地「今の県会議事堂の正門と第四高等学校の正門との間位にあたる一区域」（『石川県師範教育史』）に、男女師範学校及び附属小学校の新築工事が竣工、移転した。この時旧明倫堂の建物は

男子寄宿舍と共にこの位置に移築された。

明治11年10月3日、北陸巡幸中の明治天皇はまず県庁、次いで県庁隣の第一師範学校に臨幸、明倫堂において校長内山行貫が祝辞を奏し、その後第一師範学校と女子師範学校を視察した。

明治21年4月、師範学校の広坂通の敷地を、開校したばかりの第四高等中学校の校地の一部に充てることが決定し、明治22年11月新たに広坂通88番地（現、元付属学校用地）に校舎を新築、移転した。明治40年代に在学した付属学校の卒業生による記述によれば「（講堂）正面には『明倫堂』と大きく金文字に彫った木の額が掲げて」（『石川県師範教育史』）あったという。

明治40年、明治32年の小学校令改正による義務教育の年限延長が行われた。これに伴う教員の需要に応ずるためには広坂校舎の収容力では不足であることから、石川県は師範学校の男女分立を決定し、明治42年石川郡野村（現在、金沢市弥生）に新校舎起工。大正2年、男子生徒は石川郡野村の校舎に移転。女子生徒はそのまま広坂通校舎に残り、翌3年石川県女子師範学校とした。



石川師範学校講堂

石川県師範学校卒業アルバム(S.16,3)より

架谷一男氏提供

2つの扁額は野村の新校舎に移され、「明倫堂」は講堂正面向かって右上に、「経武館」は左上に掲げられた。

大正から昭和初期にかけて内外の情勢が大きく変化し、これに応じて、学校教育は「郷土教育」、「練成」などを取り入れ、軍国主義に傾斜していく。練成の一環として「道場」の設置が各地で盛んになった。昭和12年9月、紀元2600年記念事業として修養道場鞍ヶ嶽明倫堂が竣工。ここに合宿し農作業・団体訓練を行うというもので、軍国主義教育の一翼を担った。教職員・生徒・卒業生・一般からの資金の提供をうけ、建設作業には生徒も従事したという。鞍ヶ嶽明倫堂の「修道綱領」には「明倫の本義に則りて各其分を守り以て没我奉公の生活を公ぜん（『石川県師範教育史』）」とあり、「明倫」の語は軍国主義により拡大解釈された。やがて戦局の激化に伴い、明倫堂での修学も行われなくなった。

昭和18年師範教育令改正により、府県立の師範学校は官立になり、修業年限3年の専門学校程度の教育機関となる。石川県師範学校は石川師範学校と改称する。

戦争終結後、各地の官立校を1府県1校の新制大学に統合する方針が出された。石川師範学校は、学芸大学への昇格運動の一時期を経て、新制大学の教育学部を形成することになる。

国立学校設置法公布に先立ち、昭和24年4月石川師範学校女子部と石川青年師範学校を石川師範学校男子部のある弥生校舎に移した。5月同法により金沢大学石川師範学校、金沢大学石川青年師範学校と改称した。6月、両校の2年生からの選抜による入学生を含めて、金沢大学教育学部の入学式が行われた。

昭和26年3月16日石川師範学校最後の卒業生を送り、翌17日閉校式が行われた。学校長徳光八郎は式辞で、戦前の師範教育の象徴であった2つの扁額について「歴史と伝統を誇る由緒深いこの『明倫堂』『経武館』の二大扁額は、この学舎がやがて城内に移っても永遠にわが教育学部の講堂を飾ることでありましょう」（『石川県師範教育史』）と述べた。教育学部は引き続き弥生校舎を使用したが、昭和27年2月金沢城内へ移転。弥生校舎は直ちに金沢市立泉中学校が使用した。「明倫堂」「経武館」の扁額は金沢城内に運ばれ石川門に保管された。

2つの扁額は、平成元年資料館設置に伴い当初搬入資料として資料館に収蔵され今日に至っている。

資料館 在田則子



「医学教育の系譜と古医書」の執筆と資料の選定・解説は、金沢医科大学名誉教授 寺畑喜朔氏に担当していただいた。

藩校、四高、石師に関しては、日本英学史学会北陸支部長 今井一良氏，教育学部 江森一郎教授，五十年史編纂室 谷本宗生助手の御教示をいただいた。

次の方々にも御教示いただいた。正橋剛二氏，伊藤圭典氏，道端孫左工門氏，架谷一男氏

---

金沢大学創立 50 周年記念展示

「蔵書展 金沢大学の源流」

発行日 平成 11 年 5 月 29 日

発行者 金沢大学創立 50 周年記念展示実行委員会

金沢大学附属図書館

金沢大学資料館

編 集 金沢大学附属図書館

金沢大学資料館

住所：〒920-1192 金沢市角間町

電話：076-264-5200（附属図書館）

076-264-5215（資料館）

---